



北信鐵道敷設趣意書

4405



114  
A2900



鐵道敷設趣意書

第一 本鐵道敷設ノ位地

此信鐵道線路ハ其一端ヲ官設鐵道信越線、終  
 京タル新渾縣下直江津ニ起シ全縣下系奥川ヲ  
 經、冒山縣下冒山市ニ到リ、官設豫定線タル北  
 陸鐵道線路ニ聯絡スル、一線(此延長七十五哩  
 四分ノ三)又本線ヲ系奥川ニ分岐シ長野縣下大  
 町ヲ經、合縣下松本ニ到リ、テ官設豫定線タル中  
 央聯絡鐵道線路ニ接続スル、一線(此延長六十  
 哩二分ノ一)ヨリ成ルモノニシテ其總延長百三  
 十六哩四分一ナリ

第二 本鐵道敷設ノ目的

大正十一年四月  
隈侯爵郵寄附

本鉄道敷設ノ目的ハ之ヲ直接ニシテハ  
 北陸線ト北越線ヲ聯絡シテ北陸全道ノ振起  
 ニ資スルニ在リ  
 北陸道ノ要部ト東山道ノ要部トヲ聯絡シ官  
 設豫芝線タル中央鉄道線路ト相待テ北陸東  
 山東海ノ三大道ヲ横貫シ以テ本州中部ノ隆  
 興ニ便シ  
 之ヲ間接ニシテハ  
 一線ハ北部ノ最近線ニ據リテ奥羽諸州ト関  
 西諸州ノ媒介ニ居リ  
 一線ハ中部ノ最境路ヲ占メテ北陸諸州ト関  
 東諸州ノ接続ニ當リ

(電話五八四 東京市京橋區北紺屋町三大成社印行)

彼是相應シテ運輸交通ノ利便ヲ完成セムトス  
 ルニアリ  
 第三 本鐵道敷設ノ必要  
 往年鐵道敷設法ノ制定セラレハヤ我國鐵道ノ  
 大方針茲ニ立定スル所アリ特ニ其才一着手ト  
 シテ奥羽線及北陸線ノ敷設ヲ成シタルハ從來本  
 州南部ノ方面ノニ偏シタル交通機關ノ發達ヲ  
 漸次北部ノ方面ニ及サシムルニモ、ニ之ヲ開  
 明ノ利器ヲ全國ニ均霑スルノ至義ニ於テ最モ  
 喜フヘキトナシ一方ニハ北陸線ノ敷設ヲ敷  
 賀ニ起シテ富山ニ止メ一方ニハ北越線ノ敷設  
 ヲ直江津ニ起シテ新糸田ニ止メ(北越線ハ私設

鉄道会社ニ敷設ノ許可ヲ與ヘラハシ、至リ  
 狹リ直江津富山間ノミヲ才一期敷設ノ豫定線  
 中ニ除カレタルハ  
 聯絡分ツヘカササル北陸一帯ノ大系脈ヲ中  
 途ニ断絶スルモノニシテ  
 蓋シ缺點ノ小ナラサルモ、ナリ故ニ北陸及北  
 越線ノ敷設成リタル後ニ於テモ中断サレタル  
 僅六日間ハ未だ其ニ海ニ危險ノ航路ヲ侵スニ  
 アラスンハ陸ニ山河ノ堆路ニ抑ラサルヘカラ  
 スシテ最も密着ヲ要スヘキ相互ノ關係特ニ疎  
 隔シ北陸全道ノ交通上著大ノ障礙ヲ来スヘキ  
 其趣ハ

(電話五八四 東京市京橋區北紺屋町三大成社印行)

概モ東海道鉄道ニシテ静岡乃至名古屋間ヲ  
 中断シタルニ類シ  
 其不便、其不利頗ル夥シキヤ知ルヘシ  
 加之加能越ノ諸州ヨリ東京横濱其他関東地方  
 ニ對スル交通ノ關係ハ直江津富山間ノ鉄道ニ  
 シテ成功セサル間ハ  
 北陸線ヨリ敷賀線ヲ經テ東海道鉄道ニ抑ル  
 、大迂回ヲナス事又ハ  
 海路ヲ航シテ直江津ヨリ信越線ニ乗スルノ  
 不便ヲ経カレヘカラスシテ  
 二途之ヲ何レニスルモ交ヒテ些少ノ不利ニ止  
 ラス時ニ貨物ノ種類ニヨリテハ(米穀ノ如キ

其著しキモノトス  
 陸ニ鉄道ノ全通セサル為ノ遠ク海路ヲ津輕  
 海峡ニ迂迴シテ東京灣ヨリ上陸スルモノアリ  
 實ニ本州ノ半部ヲ一週スルモノニシテ其  
 幾十倍ノ迂路ニ出ルヤ知ルヘカラス  
 如斯ノ事態豈日新開明ノ今日ニ於テ能ク堪ヘ  
 得ヘキコトムヤ  
 且夫シ更ニ眼ヲ轉シテ他日北越線ノ延長成功  
 シ奥羽線トノ聯絡成リヨ奥羽諸州ト關西諸州  
 ノ交通ハ北越線ヨリ北陸線ヲ經テ敦賀線(又ハ  
 京都地方)ニ出ヅルノ最近線路ヲ採ルヘキ時ニ  
 想ヒ至シハ

(電話五八四 東京市京橋區北船場町三大成社印行)

本線ハ實ニ其中間ニ介在シテ奥羽ト關西ト  
 聯絡スルノ最要地位ニ立ツサレヘカラス  
 是ヲ以テ直江津富山間ノ鉄道ハ  
 北陸及北越ノ兩線ヲ聯絡シテ北陸全道ノ交  
 通機關ヲ完成スルニ於テ主要タルノミナラ  
 ス  
 北陸諸州ト關東諸州ト密接スルニ於テモ  
 奥羽諸州ト關西諸州ト聯絡スルニ於テモ  
 必要歟ヲヘカラサルノ重要線路ナリ  
 若シ夫レ系奥川柘原間ノ線路ニ至リテハ更ニ  
 特殊ノ必要アリ蓋シ今ノ所謂中央線ナルモノ  
 ニシテ八王子ヨリ甲信兩州ヲ經過シ名古屋ニ

於テ東海道鐵道ニ接続スルノコトナリトセバ此  
 點  
 東京名古屋間ヲ東海道ノ海岸ニ由ラスレテ  
 東山道ノ山間ヲ経ルト云フニ過スレテ  
 其効益ハ東海道鐵道ノ兵商上ノ趣莫ク備フト  
 夫ニ甲斐岡下信濃ノ南部トニ運輸ノ利便ヲ供  
 スルニ止マリ他ニ顯著ナル利能アラズ然レト  
 モ若シ  
 此線路ノ要部ヨリ北陸道ノ要部ニ通スルノ  
 道ヲ得ム乎此レ實ニ北陸東山東海ノ三大道  
 ノ横貫スルモノニシテ普ク本州中部ノ重要  
 地ヲ聯絡スルニ最モ南(太平洋)北(日本海)ノ海

(附註五八四) 東京市京橋區北細屋町三大成社印行

運ト内地ノ陸運トヲ順應セシメ本州全般ノ  
 交通上ニ絶大ノ便宜ヲ生スベシ  
 於茲乎中央線ノ敷設愈々其効益ヲ増スヘク北  
 信北越ノ兩線亦益々効用ヲ加フヘシ而シテ今  
 此聯絡ノ通路ニ當ルモノヲ求ムルニ信越鐵道  
 ノ藤井ニ分歧シ松本ヲ経テ中央線ニ接続スル  
 所謂中央聯絡線定線ナルモノハ此目的ヲ達ス  
 ルニ於テ稍々効ナキニアラカシ其北陸道ノ  
 接続莫ク直江津ナルヲ以テ重ニ北越線ト中央  
 線ノ聯絡ニ止マリ利ノ北陸線ニ及フモノナレ  
 然ルニ  
 直江津富山間ナル糸奥川ヨリ松本ニ至リテ

中央聯絡豫足線、接続スル線路ハ、唯モ北陸  
 及ヒ北越線、中部ニ在リテ而カモ中央線、  
 中部ニ聯絡スルモ、ナルカ故ニ北陸東山東  
 海ノ三大道横貫ニ於ケル最近線路タルニ  
 ナラス北陸諸州ノ関東諸州、聯絡ニ於テハ  
 特ニ其比ノ最捷路ナリ北越線ト中央線、接  
 續ニモ亦最近ノ線路トス  
 然ラハ則チ糸魚川松本間鉄道ノ成功ハ中央線  
 ノ利益、為メニモ北陸及ヒ北越線、効用、為  
 之所謂  
 九仞ノ功ニ於ケル一簣ニシテ

直江津富山間、鉄道ト相持シテ至重要ノ線

路タルヤ知ルヘキナリ

第四 本鐵道敷設ノ効用

本鐵道ハ以上ノ如キ必要ニ起因スルカ故ニ其  
 敷設ノ上ニ於テ

先ツ此最大必要ヲ免スヘキ種々ノ効用アル  
 ハキハ言フ待ス

而シテ熟ラハ本鐵道ノ形勢ヲ案スルニ  
 其位置方々ニ北陸北越ノ西線ト中央線ノ中  
 間ニ立テ其右手ハ北越線ニ連リテ奥羽線ニ  
 通シ其左手ハ北陸線ニ接シテ敦賀線及ヒ北  
 陸山陰聯絡豫足線ニ應シ更ニ其右足ハ中央  
 線ノ八王子線ニ結ビテ東京ニ及ヒ其左足ハ

中央線、水曾線、讀キテ名古屋、達シ加フ  
 ル、其右側ハ中央線、豫定線、入シテ信越  
 線、合セ左右前後悉ク重要幹線、联接シテ  
 實ニ鐵道大系脈ノ要部ニ當リ優ニ國家ノ大  
 幹線タルヘキ地矣ヲ占有セリ  
 カシハ其効用ノ著大ナルヘキハ推想スルニ容  
 易ナルヘシト宜ク試ニ其一ニテ數フシハ  
 北陸諸州、東京其他関東諸州ノ交通ニ於テ  
 本線、最捷路タル  
 蓋シ少カラサルノ効益ヲ奉テ得ヘシ則チ尤  
 表ヲ就テ見ヨ

北陸諸州、関東諸州ノ距離比較

(電報五八四 東京市京橋區北紺屋町三大成社印行)

東海道鐵道	四三九、三三	四〇一、三三	三五四、三三
信越線	二五六、一〇	二九四、一〇	三四一、一〇
北信線	二四三、六五	二八一、六五	三二八、六五

富士東京間  
 全東京間  
 福井東京間  
 哩  
 哩  
 哩

故ニ本鐵道線路ノ富士直江津間ヲ經テ信越線  
 ヨリ東京ニ達スルハ東海道鐵道ニ乘スルニ  
 比シテ富士地方ニ在リハ百八十三哩三十三鎖  
 ノ距離ヲ短縮スルヲ得、全沢地方ニ在テハ百七  
 哩二十三鎖ノ短縮ヲ得、福井地方ニ在テハ十二  
 哩二十三鎖ノ短縮ヲ得ルナリ而シテ更ニ富士  
 直江津間ノ急奥川ニ分シテ沼本ヨリ中央線ヲ  
 經テ東京ニ達スルハ信越線ヲ經過スルニ比



各々高ホ十二哩二十五額ノ短縮ヲ得ルカ上  
 信越線ノ碓氷嶺ニ於テル「ア」式設計已間  
 ヲ經ルカ如キ困難ヲカルハキヲ以テ其利益特  
 ニ著シキモノナルヘシ故ニ本鉄道表紙ノ上ハ  
 北陸諸州ト關東諸州ノ交通ハ一ニ本線ニ於ル  
 ニ至リカノ幾十萬石ヲ以テ數フハキ莫大ナル  
 北陸輸出来カ海路ニ本州ノ半部ヲ一週シテ東  
 京灣ニ上陸スルカ如キ大不経済ノ顯象ヲ絶滅  
 スヘク加能越諸州ニ每比ノ特産トシテ和テ  
 タル陶・銅・漆・炭類日本海沿岸地方ニ於ル海産物  
 及信州地方ニ於ル蠶糸・木材・礦物類、茶・造等  
 更ニ括目シテ其進歩ヲ見得ヘキナリ

(電報五八四 東京市京橋區北紺屋町三大成社印行)

次ニ  
 奥羽諸州ト關西諸州ノ交通ニ於テ本線方面  
 ノ最近線路タルヲ  
 亦多大ノ利便ヲ生スヘシ則チ左表ヲ見ヨ

日本鐵道及 東海道鐵道	米沢新 柴田間	北越線	北信線	北陸線	敦賀間 柴原間	合計
二 六哩	一 八二哩	二 八哩	二 八哩	二 八哩	二 八哩	二 八哩
米沢福島間	福島新橋間	新橋米原間	合計			
二 六哩	一 八二哩	二 八哩	二 八哩			
北越信北陸線	七〇	八八	七五	五九	一三〇	六
故ニ米沢(羽前國)ヨリ米原(近江國)ニ至ル線ノ數ハ					三〇	一三八
所ニ達セシニ北越北信北陸等ノ諸線ニ據ル						
ト現在ノ日本鐵道會社線及東海道鐵道ニ乘ス						

ルヨリハ百〇四哩七十四鎖ノ距離ヲ短縮スル  
ノ利益アリ且更ニ

福島(岩代國ニシテ東上線ヨリ米原ニ達スル  
下奥羽線ノ合スル處)

日本鐵道會社線及東海通鐵道ニ乘スルハ其哩  
程四百六十六哩六十鎖ナリ本線ノ方面ニ據  
ルハ四百十三哩六十鎖ニシテ五十二哩七  
十四鎖ノ距離短縮ヲ得ヘキヲ以テ

東北全州ト關西諸州ノ交通ニ於テ本線方  
面ノ最近線路タルノ利ヨルハ明白ナル事実  
ナリ

若シ目下計畫中ナリト云フ京北鐵道ニシテ

(電話五八四 東京市京橋區北紺屋町三大成社印行)

成功スルトキハ其敦賀京都間ノ距離五十四  
哩五十九鎖トナリ敦賀線ヲ米原ニ出テ京都  
ニ達スル七十五哩六十九鎖ニ比スルハ二十  
一哩十鎖ノ短縮ヲ得ヘキヲ以テ本線方面ニ  
於ルトキハ日本鐵道會社線及東海道鐵道ニ乘  
スルニ比シテ米沢ヨリスルモハ百二十六  
哩四鎖ノ短縮ヲ得福島ヨリスルモハ七十  
四哩四鎖ノ短縮ヲ得テ更ニ一層ノ利益アル  
ハニ

而シテ古来日本海沿岸地方ノ開明カ如何ニ關  
西諸州ト密着ノ關係ヲ有スルヤテ蒸シ特ニ奥  
羽地方ト關西地方トノ来往頻繁ナルノ事実ニ

觀ハ此距離縮短ノ双五ノ交通上ニ與テハ、利便ハ豫測ニ餘ルモ、アハヘシ且又

北越線ト中央線、聯絡ニ於テモ本線ハ最境路ヲル、利ヲ有ス

則チ左表ヲ見テ

北越線ト中央線、聯絡距離比較

中央聯絡豫定線	四一・二〇	五一・五〇	九二・七一
松本至真岡	四一・二〇	五一・五〇	九二・七一
糸魚川直江津間			
合計			

北信鐵道線 六〇・四〇 二四六〇 八五・二〇

故ニ北越線ト中央線、聯絡ニ於テ本線ト中央

(電話五八四 東京市京橋區北紺屋町三大成社印行)

聯絡豫定線ニ比シテ其距離ニ七哩五十一鎖ヲ短縮スルノ利益アリ特ニ中央聯絡線ニハ巨大ノ隧道アルニシテラ最急勾配、箇所甚多キニ及シ本線ハ概シテ緩勾配ニ止マルヲ以テ此莫ニ於テモ更ニ一層ノ利益ヲ見ルヘシ本鐵道ノ効用如斯クシテ多シ況レヤ他日西比利亞鐵道ノ成功ニ對シ我カ日本海沿岸一帯ノ地特ニ北陸諸州カ經濟上ニ軍事上ニ百端ノ利益又ハ警備ヲ要シ前途益々繁栄ヲ増シテ其交通ニ類繁ヲ加フル

今日ノ東海通商ニ多ク讓ラサルノ趨勢ヲ来スヘキヲ想フ中ハ

北信鐵道株式會社起業目論見書

本鐵道ノ敷設ハ最モ其急要ヲ感スヘク其初益  
、愈々出テ愈々顕著ナルヘキモ、夕想察スル  
ニ難カラサルヘシ

第五 本鐵道ノ収支豫算

本項ハ起業目論見書ニ詳ナルヲ以テ茲ニ省ク

北信鐵道株式會社起業目論見書

第一、 本會社ノ組織

本會社ノ組織ハ株式會社トス

第二、 本會社ノ目的

本會社ハ北陸鐵道線路ト北越鐵道線路ヲ接續シ尚此兩線路ヲ中央鐵道線路ニ聯絡スルノ目的ヲ以テ鐵道ヲ敷設シ旅客及貨物運輸ノ營業ヲ為スモトス

第三、 社名及本社所在地

本會社ノ社名ハ北信鐵道會社ト稱シ本社ヲ東京市ニ置ク

第四、 鐵道線路

本會社、鐵道ヲ敷設スヘキ線路ハ新海縣下中  
 頸城郡直江津町ヨリ今縣下西頸城郡糸鼻川町  
 ヲ經テ畠山縣下畠山市ニ達スル間（此延長七  
 十五哩四分、三）及本線路ヲ糸鼻川町ニ分岐シ  
 長野縣下北安曇郡大町ヲ經テ今縣下東筑摩郡  
 松本町ニ到ル間（此延長六十哩二分、一）ニシテ  
 其總延長百三十七哩四分、一ニ且リ線路ノ形  
 勢別紙畧圖、如ク軌道ノ幅員三尺六寸トス  
 第五、  
 資本金及株數  
 本會社ノ資本金ハ八百五十萬圓ニシテ之ヲ於  
 七萬株ニ分テ一株ノ金額ヲ五拾圓トス  
 第六、  
 鐵道敷設費用及收支概算

（附圖五八四 東京市京橋區北紺屋町三大成社印行）

本會社ノ鐵道敷設費用及運輸營業上ノ收支概  
 算左ノ如シ  
 一 金八百五十萬圓 鐵道敷設費用總額

內譯

金一万九千〇七拾五圓	線路豫測費
金拾三萬六千五百圓	工事監督費
金四拾五萬七千圓	用地費
金百五拾六萬七千二百四拾壹圓五拾錢	土工費
金百拾六萬九千九百貳拾圓	橋梁費
金三拾五萬〇八百〇九圓	コンクリート費
金三萬四千〇六拾貳圓五拾錢	伏樋費
金貳百三拾壹萬七千五百拾圓八拾八錢	隧道費

金百貳拾三萬九千七百七拾五圓	軌道費
金九萬七千五百圓	停車場費
金五拾五萬八千四百八拾六圓六拾貳錢	車輛費
金五萬四千五百圓	器械場費
金貳萬。四百三拾七圓五拾錢	諸建物費
金八萬壹千七百五拾圓	運送費
金三萬四千。六拾貳圓五拾錢	建築用汽車費
金貳萬七千貳百五拾圓	建築用具費
金四千。八拾七圓五拾錢	柵垣及境界坑費
金七萬九千圓	總庶費
金壹萬三千六百貳拾五圓	電信架設費
金貳拾五萬圓	豫備費

(電話五九四 東京市京橋區北紺屋町三大成社印行)

金九拾壹萬六千八百七拾參圓四拾錢五厘	運輸營業收入總額
內 訳	
金五拾萬。壹千貳百九拾貳圓八拾七錢七厘	乘客收入額
金四拾壹萬五千五百八拾四圓五拾錢八厘	貨物收入額
金參拾貳萬叁千貳百五拾壹圓貳錢五厘	運輸營業支出總額
內 訳	
金八萬七千六百三拾貳圓七拾四錢	運輸費
金八千八百八拾伍圓七拾錢五厘	線路保存費
金拾萬六千七百六拾貳圓貳錢五厘	汽車費
金貳萬。三百貳拾八圓。叁錢五厘	總庶費
金五拾九萬三千六百貳拾圓三拾貳錢	收支差引利益額
乃才資本金八百五拾萬圓。對己年六分九厘八毛強。三占八	





